

特別上映企画「フランス映画と女たち」

竹内航汰

特別上映企画「フランス映画と女たち」は、2023年10月6日及び7日にアテネ・フランス文化センターにて開催された。本企画は、映画と女優（の身体）表象の再考が目的であり、日本未公開作を含む三作品にオリジナル字幕を付けて上映した。こうした試みは、近年のフランスでも映画研究者イリス・ブレイ『女性のまなざし：スクリーンにおける革命 *Le regard féminin : Une révolution à l'écran*』（2019年）が出版されるなど、映画における女性表象を再考する動きが盛んになっていることによる。また、各日、坂本安美さん（アンスティチュ・フランス映画プログラム主任）、堀千晶さん（早稲田大学ほか非常勤講師）といった専門家を招聘し、上映後には作品の理解を深めるための解説トークを担当していただいた。

一日目は、クロード・ゴレッタ監督『レースを編む女』（1977年）を上映した。この映画は、イザベル・ユペール演じる美容師見習いのポムが、バカンス先で出会った大学生フランソワと恋に落ちるところからはじまる。順調に進展するかと思われた二人の関係は、フランソワのポムを無意識に見下す態度や、労働者と大学生というそれぞれの社会的立場から生じる齟齬により豹変し、やがてポムは精神を壊してしまう。

この日の解説を担当された映画批評家の坂本さんは、この映画が「日本語字幕付きで上映されるのは事件」とまで称してくださった。この映画には、労働者と大学生という階級差の問題やモラルハラスメントといった極めて現代的な主題が存在しているために、本作を日本語字幕付きで上映できたことを企画者も満足している。

イザベル・ユペール本人へのインタビュー経験もある坂本さんは、複数のインタビューを引用しながら、『レースを編む女』の主演を務めたユペールがいかにして世界的な女優になったのかを語ってくださった。本作ではユペールが感情を剥き出しにする演技や大げさな身ぶりをすることはしないものの、彼女の咳払いや小さな傷、ぎこちない歩き方といった些細な身体所作からポムの感情を十分に読み取ることができるのだと坂本さんは指摘された。劇中の細かな所作に着目した作品分析は、プロの批評家の技を実感させられるものであった。またラストショットについて、坂本さんはイングマル・ベルイマン監督『不良少女モニカ』（1952年）を引き合いに出しながら、そのまなざしの力強さ、ユペールの女優としての特異性についても触れられた。このベルイマン作品への言及は、トーク後の質疑応答・対話の際にも観客からの反応を得た。坂本さんのご厚意で質疑応答の時間が設けられたことで、より充実した日となったことは間違いない。

二日目は、クロード・シャブロール監督『ヴィオレット・ノジエール』（1978年）とジャン・シャポー監督『盗むひと』（1966年）を上映した。『ヴィオレット・ノジエール』は、1933

年のフランスで起きた事件の映画化である。イザベル・ユペールが演じるヴィオレット・ノジエールは父親を毒殺した女性犯罪者であり、彼女は逮捕後に、実父からの近親相姦を殺害の理由としてあげているが立証されていない。シュルレアリストたちからミューズとして讃えられた、文学史においても有名な女性犯罪者についてのフィクションを交えた伝記映画である。『盗むひと』は、ロミー・シュナイダー演じるジュリアが、十九歳の時にやむなく手放した子どもを六年越しに取り戻すため、誘拐を企てるという物語である。マルグリット・デュラスがダイアログを書いた本作は、この上映会によって日本初公開となった。

上映後には堀千晶さんによる講演が行われ、まず、作品と大いに関係のある「三四三人の宣言」について解説して下さった。この宣言は、当時、フランスでは妊娠中絶が違法であり、そうした状況に異議を申し立てるための中絶経験の告白をする女性たちの署名運動に由来する。また、この宣言文の起草者はシモーヌ・ド・ボーヴォワールである。署名には、マルグリット・デュラスやステファヌ・オードランといった上映作品に携わった人々も参加している。ドイツ版の宣言文にはロミー・シュナイダーが署名した。堀さんはそこから敷衍するように、当時の時代背景や社会問題、作品構造などについて語って下さった。加えて、堀さんは自身の豊かな映画鑑賞経験を活かし、それぞれの作品とフリッツ・ラングやジャン・ルノワール、マノエル・ド・オリヴェイラの作品との比較や、『盗むひと』における縦方向のパンを多用した特徴的な構図が、シャンタル・アケルマン監督『アンナの出会い』(1978年)も担当したカメラマン、ジャン・パンゼールによるものであることを指摘された。こうした他作品へ目配せをした作品解説は、まさにアテネ・フランセ文化センター的なものとなり、数多くの映画好きの来場者からも好評であった。

各日、この限られた紙面では紹介しきれないほどの豊饒な解説をしていただき、来場者の方々からも、様々な感想をいただいて終映することができた。今回の上映では、「狂人」「犯罪者」「怪物」と形容されるであろう女性たちが出てくる映画をセレクトした。実際、ヴィオレット・ノジエールは、当時の報道でも「怪物」と称されていたことが知られている。しかし、彼女たちは狂人なのか、彼女たちの常軌を逸した行動は面白おかしいものなのか。彼女たちが過ちを犯すのは、本人のせいなのか。そんなことを鑑賞者各人が考える機会となったことを企画者として願っている。

今回の企画を実施するにあたり、学外より講演に参加して下さった坂本安美さんと堀千晶さんに感謝申し上げます。また、学外への広報を引き受けて下さった本学広報・社会連携課の皆さん、共催を下された本学総合文化研究所の皆さん、上映素材の作成を担って下さった稲垣晴夏さん、イベント当日の映写と会場運営を担当して下さったアテネ・フランセ文化センターの皆さまに、この場を借りてお礼申し上げます。

日時：2023年10月6日（金）、10月7日（土）
 場所：アテネフランセ文化センター
 企画・主催：竹内航汰（東京外国語大学博士後期課程）
 共催：東京外国語大学総合文化研究所
 学内協力：荒原邦博（東京外国語大学教授）
 学外協力：森井良（獨協大学専任講師）、稲垣晴夏



■主催 | 竹内航汰 ■会場 | アテネフランセ文化センター
 ■共催 | 東京外国語大学総合文化研究所 ■協力 | 東京外国語大学 多文化共生イノベーション研究教育フェローシップ

フランス映画と女たち

Introduction

フランス映画界を代表するふたりの女優にスポットライトを当てた特集上映を開催！日本未公開作を含むレア作・傑作の上映を通じて、フランス映画と女優あるいは女性をめぐる関係を再考する。各日上映後には、専門家によるアフタートークを開催予定。



レースを織む女
La Dentellière

東京前見舞いの少女と、休暇先のノルマンディで出会った青年の狂恋を描いた恋物語が家来の狂気へと繋がっていく。イザベル・ユベール24歳時の主演作で、その後のキャリアを決めた一作。
1977年 / クロード・ゴレツタ監督 / 107分 / DCP



ヴィオレット・ノジエール
Violette Nozière

ヴィオレットは過剰な愛理から逃れるために、職を転じてしまう。1933年の実在事件をもとにした、名匠クロード・ジャブロルの傑作。
1978年 / クロード・ジャブロル監督 / 124分 / DVD



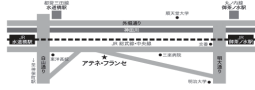
盗むひと
La voleuse

ジュリアは十代の頃にやむなく手放したわが子を取り戻そうと、脱獄を企てる。ロニー・シュナイダーとミケル・ピコロの傑作を光らせるのは、マルグリット・デュラスの脚本。
1966年 / ジャン・シャボール監督 / 88分 / DCP

10/6 上映後、坂本安美さん（アンスティチュ・フランス映画プログラム主任）によるトークを開催予定。
これまで「映画のアトリス」などでフランスの映画を数多く紹介・批評されてきた坂本さんに、フランス映画と女優あるいは女性をめぐる話題を聞いていただきます。

10/7 上映後、櫻千晶さん（フルーズ研究、早稲田大学ほか非常勤講師）によるトークを開催予定。
フランス現代思想の研究者の視点から、本企画の映画について解説をしていただきます。

Information



会場：アテネ・フランセ文化センター（御茶ノ水）
 東京都千代田区神田駿河台2-11 アテネ・フランス4F
<http://www.athenee.net/culturalcenter/>

Twitter：@iledeserte_film
 お問い合わせ先：contact@iledesertefilm.jp

Schedule

2023年10/6 (金)	10/7 (土)
18:45 『レースを織む女』 ※上映後、坂本安美によるトーク	13:50 『ヴィオレット・ノジエール』 16:20 『盗むひと』 ※上映後、櫻千晶によるトーク

Ticket

一回券：■一般 1,500円 ■学生 1,300円
 ※チケット提示により、トークは入場無料となります。
 ※チケットは当日会場にて初回上映の20分前より販売します。